

## 「主イエスへの暴行」

2015年12月29日

ルカによる福音書 22章 63節～65節。さて、見張りをしていた者たちは、イエスを侮辱したり殴ったりした。そして目隠しをして、「お前を殴ったのはだれか。言い当ててみろ」と尋ねた。そのほか、さまざまなことを言ってイエスをののしった。

主イエスはゲツセマネで捕縛され、大祭司の中庭に連行された。そこで、見張りをしていた下役たちは主イエスを侮辱し、殴った。目隠しをして、自分をメシアと言うなら、「お前を殴ったのはだれか。言い当ててみろ」、分かるはずだと言いながら殴った。更に、様々な悪口を言って、罵った。ルカ福音書は、耐え難いほどの侮辱の言葉と殴打の暴力を振るったと描いている。そして次に「夜が明けると」、即ち翌朝早く、長老、祭司長、律法学者たちが集まる最高法院（サンヒドリン）に連れ出し、裁判があったと書いている。ルカ福音書の著者は、深夜の大祭司の中庭では、正規の裁判は成立しないことを知って、翌朝、最高法院が開かれたと書き直したのではないか。

マタイ、マルコ福音書は捕縛した深夜、大祭司の中庭で、最高法院の裁判があったと書いている。マタイ、マルコ福音書の記述が事実であったと思われる。正規の裁判としては成立しないが、無理やりに強行したのである。これは、アジアでよく見られる「降格儀式」と言われるものである。中国の文化大革命の時、身分の高い者や財産を持つ者たちを引き出し、胸に罪状札をつけさせ、頭に三角の帽子をかぶらせ、あらん限りの侮辱を加え、革命に反する罪人にして、地位や名誉を剥奪した公開裁判のやり方である。人権など認めないリンチ裁判と言えよう。

エルサレム神殿当局は、正規の最高法院を開くと、主イエスを尊敬する民衆が集まり、死刑判決を言い渡すことができないので、不法な降格儀式で、主イエスの死刑判決を出したかった。律法を厳守するという彼らは律法に反しても、主イエスを亡き者にしたかった訳である。権力者たちは意に逆らう者を、法を無視しても罪人にする。これは、どこでも見られる手法である。現在の日本では「国策捜査」という言葉で言われているが、国策に合わない者を、あらゆる手段で犯罪人に仕立て、社会的に葬り去る。

ルカ福音書が伝える上記の神殿当局の下役たちの侮辱と暴力について、並行記事のマタイ福音書 26章 67節では「そして、イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者は平手で打ちながら、『メシア、お前を殴ったのはだれか。言い当ててみろ』と言った」と書いている。マルコ福音書 14章 65節では「それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、『言い当ててみろ』と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った」と書いている。唾を吐きかけることは、どの国でも同じであろうが、ユダヤ人には最大の侮辱を表す行為であった。神殿当局の権力の下で、その意向に沿う下役たちはあらん限りの手段で、主イエスをなぶり者にしたのである。

メル・ギブソン監督の「パッション」という映画が上映された。主イエスが十字架刑で命を落とすまでの12時間の姿を描いていた。事実にして作られたと言われていた。捕縛された時から、鞭打たれ続け、体中が血だらけで、地面も血で真っ赤に染まっていた。正視できないほど残酷なシーンが続いた。あまりに残酷であるとユダヤ人団体から抗議があった。また、ショック死した人もあったという。あれほどの血が流されたか、真偽は分からないが、大祭司の中庭で、主イエスは侮辱と暴力の嵐に晒されたことは確かである。